

## 別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

家族介護者の適応に関する質的研究  
—娘・嫁・配偶者の介護の物語に焦点を当てて—

氏 名

江副 文美

## 論 文 内 容 の 要 旨

家族の介護は、人生の危機と位置づけられる。渡辺 (2005) は、介護は喪失との出会いであると述べており、要介護者の心身の機能の低下を目の当りにすることによる悲しみに加え、介護のために自分の時間、空間、社会的役割が失われる可能性を指摘している。また、介護は、心・感情を使って相手に情緒的なケア・配慮を提供する際限のない労働であるため、介護者自身の生活や人生と介護との間に境界がなくなり、心身の疲弊を招く可能性が指摘されている (無藤, 2008b)。一方で、本来危機とは、心がさらに成長、発達していくか、逆に後戻り、退行していくかの岐路であり (岡本, 2007)、介護への適応は、介護者自身の人生を豊かにする可能性を秘めていると考えられる。

本論文は、家族関係の特徴づける重要な要因として、続柄の違いに着目し、主介護者の役割を担っている娘・嫁・配偶者の介護の物語に焦点を当て、一人ひとりの体験の変遷を辿り、介護にどのように対処し適応していくのか、あるいは適応の困難に陥るのか、その過程を描き出し、続柄ごとの特徴を明らかにすることを目的とする。続柄ごとの適応にかかわる要因と介護者の有する力を明らかにすることで、家族介護者への心理的支援に向けた、新たな知見の提供を目指す。Pearlin, Mullan, Semple, & Skaff (1990) が、家族介護における背景要因として、続柄を考慮することが必要であると述べているように、続柄ごとに異なる、家族の中での介護者の境遇や立ち位置、要介護者との関係によって、介護の動機や直面する困難など、体験にさまざまな違いが現れることが予想される。続柄ごとの介護の特徴が広く理解されることで、熟達した専門家のみならず、介護者の背景にある家族関係を考慮した精度の高いアセスメントが可能となり、介護者それぞれの心情に寄り添い、適応を支える心理的支援が促進されることが考えられる。

第1章では、まず、戦前から現代に至るまでの家族介護の動向と社会政策の変遷について整理した。家制度に基づく家族の中では、高齢者は、長男夫婦によって安定的な介護を約束されてきたが、社会の変動に伴い、高齢者介護を取り巻く状況は大きく変化している。次に、家族介護者の体験に関する先行研究の3つの主要なアプローチ、介護負担感に関する検討、介護肯定感に関する検討、認知症患者を介護する家族の体験過程に関する検討について概観した。中でも、介護負担感に関する研究は最も歴史が古く、多くの研究者が携わってきた先行研究のメインストリームである。さらに、家族介護者への心理的支援に関する主要な取り組みを概説した。認知症患者を介護する家族への心理教育と認知症の家族会は、日本で最も盛んに行われている取り組みである。以上を踏まえて、問題の所在と本論文の目的を明らかにした。介護者それぞれの背景要因を考慮し、かつ個別性を損なうことなく介護者の体験を理解することが、介護者への心理的支援を発展させるために必要な研究課題として示された。

第2章(研究1)の目的は、高齢の母親を介護する娘介護者の適応にかかわる要因を明らかにすることであった。7名の娘介護者を対象に半構造化面接を実施し、調査協力者の介護の体験を時系列に沿って聴取した。各調査協力者の体験を描き出すフローチャートを作成し、事例間の共通性と相違点について検討を行った。その結果、【母娘関係にかかわるわだかまり】は、娘介護者の適応を困難にする最大の要因であることが明らかになった。【母娘関係にかかわるわだかまり】は、幼少期あるいは思春期に生起し、介護が始まり母親との接触頻度が高まることで顕在化した。【母娘関係におけるわだかまり】を抱えた娘介護者は、母親と決別することなく、心理的距離の近いかかわりを維持したまま介護に至っていた。また、【母娘関係にかかわるわだかまり】は、連鎖的に【きょうだいへの不満】を引き起こしており、原家族全体の関係の質が、娘介護者の適応に影響を及ぼすことが明らかになった。一方、娘介護者の適応を助ける要因として、【人生の指針となる信念】と【きょうだいと協力】が抽出された。【人生の指針となる信念】を有している娘介護者は、周囲のサポートを利用しながら、自分のペースで主体的に介護に取り組むことができていた。以上より、心理的距離の近い母娘関係が継続する場合には介護開始までに【母娘関係におけるわだかまり】を解消する機会を逸し、娘介護者の適応が困難に陥る危険があること、自分と母親それぞれの個人としての人生を尊重することが、娘介護者の適応を促進することが示唆された。

第3章(研究2)の目的は、嫁介護者が義父母の介護にどのように対処し適応していくのか、その過程を明らかにすることであった。10名の嫁介護者を対象に半構造化面接を実施し、調査協力者の介護の体験を時系列に沿って聴取した。複線径路等至性モデリングを用いて分析を行った。その結果、以下の適応過程が描き出された。まず、嫁介護者は、結婚当初から【嫁の義務】として介護を予期していた。

そして、義父母の老いや病に直面すると【介護を受容】していた。【義父母との絆】や【義父母に感謝】が生起していることにより、【義父母の症状を受容】し【義父母に共感】することができ、【義父母とのかかわりにおける喜び】から【介護の肯定的意味】や【満足】を得ることができていた。また、【客観的理解】や【諦め】によって、義父母の症状によるトラブルに対処していた。一方、【義父母とのかかわりにおける傷つき】は、【精神的疲労】を強めていた。以上より、義父母との良好な関係に価値を見いだすことで、前向きに介護に取り組み、自身の成長につながる体験として、介護を受け止めているポジティブな嫁介護者像が明らかになった。さらに、嫁介護者は、義理の関係であることで、実子よりも要介護者を個人として受け止めやすく、認知症などの症状によるトラブルに際し、冷静に対処できる強みを有していることが示唆された。

第4章（研究3）の目的は、配偶者介護における適応過程を明らかにすることであった。配偶者介護の経験者4名を対象に半構造化面接を実施した。配偶者は身体機能の障害を伴う疾患を発症し、全面的な介護を必要としていた。認知症には罹患していなかった。調査協力者の介護の体験を時系列に沿って聴取し、複線径路等至性モデリングを用いて分析を行った。その結果、介護者は、配偶者の発症によって【困惑】に陥るが、【夫婦の絆】を実感することで【介護を受容】し、【積極的姿勢】で介護に取り組んでいることが明らかになった。さらに、介護者は【心身の負担】や【介護による犠牲】に留まることはなく、【サポートを活用】し【周囲の支え】を実感することで、【療養環境を肯定的に評価】し、【比較】により自分の置かれた状況の優位性を見いだすことで、【余裕】を実感することができていた。また、子育てや仕事といった介護以外の役割が、夫婦関係を支える【精神的支柱】となっていた。以上より、配偶者介護における適応過程は、【夫婦の絆】つまり伴侶性によって支えられていることが示唆された。そして、介護者が【余裕】を維持し良好な介護生活を送るための鍵は、介護を囲い込まず、【サポートを活用】と【周囲の支え】を生かすマネジメント力であることが明らかになった。なお、認知症配偶者介護に関しては、コミュニケーションの障害や人格の変化によって、介護者の大多数が夫婦の親密さの崩壊を経験していると報告されており（Boylstein & Hayes, 2012）、配偶者との精神的なつながりが損なわれることで、伴侶性の危機に直面する可能性が高いと考えられる。

第5章では、各研究で得られた知見を整理した。そして、本論文の意義として、①家族介護への適応がもたらす人間発達と家族の成長、②家族介護者への心理的支援に有用な続柄ごとの特徴、③母親を介護する娘介護者への心理的支援に有効な視点、④データとの対話に基づいた柔軟な研究姿勢の重要性の4点について考察した。続いて、本論文の限界と課題として、本論文で得られた知見の検証、および家族介護に関する対象を広げた知見の蓄積の必要性について言及した。最後に、今後の展望

として、家族介護者への心理的支援の発展に向けた提言を行った。